

~~~~~

年表

ウーマン・リブの歩み (2)

北川ちか子・編

~~~~~

1974年	1973年	年
<p>3・24 優生保護法改悪を阻止する一〇〇〇人集会</p> <p>3 2 1 1 新しい地平が設立される 家庭科の男女共修をすすめる会結成 女性解放戦線結成(東京)</p>	<p>12・25 羽田空港で「キーセン観光」性侵略反対」のピラまき(女たちの会、リブ・センター)</p> <p>12 キーセン観光に反対する女たちの会結成</p> <p>12・8 経団連へデモ「もうガマンできない物価高に抗議する女たちの集会」(婦民クラブ)</p> <p>11・30 羊水チェック大討論会(静岡)</p> <p>11 女解放連絡会結成(札幌)</p> <p>11 生理用品無料設置要求実行委員会結成(東北大)</p>	<p>リブ運動</p>
<p>3 2 教員人材法成立 婦人に関する諸問題の総合調査(労働省)</p>	<p>12・17 大木よねさん死去</p> <p>12・19 ソウル金浦空港で韓国女子学生ピラまき</p> <p>12 都内各デパートベビーカー使用禁止</p> <p>12 日韓閣僚会議</p> <p>12 「ナース・バンク」設立(厚生省)</p>	<p>婦人政策・一般状況</p>
<p>「新しい地平」</p>	<p>ニュース「女冊子画報」</p>	<p>出版活動</p>

11	夫の暴力から逃れ自立をめざす女たちの家を創ろう 決起集会
11	23 侵略Ⅱ差別と闘うアジア婦人会議大会
12	女解放労働組合合宿(北海道)
12	5-8 国際婦人年をきっかけとして行動をおこす会総括 集会
12	3 ポイント解散(一九七六年三月ホーキ星設立)
12	ウーマンズ・ハウス(名古屋)設立

〈編集部より〉

前号に引きつづき年表構成「ウーマン・リップの歩み」の後半を掲載しましたが、前号で予告していたアンケート「おんなの共同体、これから——明日へ向けての試み——」の集計・報告は、その後の取り組みが遅れており、掲載を延期させていただきます。

このアンケートは、リップが即時的解放、「いま、ここから開始される」解放のために組み始めた共同体の、ここ数年にわたるさまざまな試みと実践の現状を報告するとともに、女、子供、集団そして生活をどのようにな創っていくかを探っているのかを探ろうとしています。貴重な問題提起を含むと同時に、きわめて示唆的な課題なり考え方の素材が提出できるものと思っております。

乞う、御期待!

10	国際婦人年記念日本婦人問題会議(天皇 出席)
----	---------------------------

(68頁より続く)

- 8、渡辺寛、前掲書。
- 9、『農業問題研究』 桜井隆一 二頁。
- 10、農村青年社の思想・運動は、一九七二年に発行された『農村青年社運動史』にはほぼ全容が示されている。私の論述も全面的に同書に基づいてなされている。
- 11、最近復刻本が出たということなので、容易に入手できるだろう。
- 12、『権藤成卿』 滝沢誠 八九頁。
- 13、『現代政治の思想と行動』 丸山真男 四五頁。
- 14、『農本主義の再検討』 安達生恒。
- 15、丸山真男 前掲書 五一頁。
- 16、『権力の思想と個人の思想』 桶谷秀昭(展覧七〇年一月)。
- 17、『伝承の論理』 安永寿延 二二頁。

クロンシュタット・イズヴエスチャ

14号 一九七二年三月一六日

La Commune de
Cronstadt
-Cronstadt
Izvestias-
Delibaste 1969

吉原文明・訳

最終回

砲台から発砲された。一七時に中止された。一八時に敵機三機が急襲し始めた。爆弾一発が投下されたが損害はなかった。敵の飛行機は、我らの対空砲台から発砲された最初の弾丸によって射ち落された。

臨時革命委員会委員長代理 アソロフ
防衛隊長 ソワヴァノフ

戦闘報告

今日三月一六日一六時に、革命広場の海兵聖堂に於ける追悼ミサの後、兄弟たちの墓に埋葬されている労働者解放戦の最初の犠牲者たちの葬儀が行なわれる。戦場での死者十名、負傷して死んだ者十名。

いわゆる「社会主義」について

十月革命の過程において、水兵・赤軍兵士そして農民は、ソヴェト権力のために、労働者共和国建設のために戦ってきた。共産党は大衆の渴望をしっかりと把握していた。党は、ありとあらゆるスローガンと軍旗の下に、大衆を誘い込んだ。党は、ボルシェヴィキのみが建設しうる社会主義へと、大衆を導くことを約束した。労働者と農民は、叫んだ。奴隸制は、伝説の領域に入ったのだ……と。それは、田園に、工場に、作業場に、自由労働の時が当来たかのように見えた。それは、権力が労働

三月一四日二四時から、三月一五日二時まで。六時ごろ敵の分遣隊が、我々の前哨の方へ斥候しながら近づいてきた。われわれの銃手は彼らを四散させ、何人かを捕えた。一一時、数発の弾丸が敵の砲台から発砲された。

三月一五日の二時から、二四時まで。一四時まで、断続的に交互に

働者たちの手中に握られたかのように見えた。

だが共産主義者の巧みな宣伝は、党の隊列のなかへと人民の子弟を糾合し、そこで彼らは厳格な規律に従わされた。それから、自からの力量を自覚した共産主義者たちは、まず、他の傾向の社会主義者たちを権力の座から漸く排除した。その後、彼らは、労働者と農民の名で統治しながら、労働者・農民を国家のあらゆるポストから追放していった。共産主義者たちは、そうして奪い取られた権力の替わりに、個人的権力のあらゆる専断を伴う人民委員たちの管理を施した。

落着き払った労働者の意志にもかかわらず、彼らは自由労働の基礎である新しい社会建設の代わりに、奴隷制を伴った国営の社会主義建設にとりかかった。産業が完全に破壊されてしまったので、「労働者管理」に変えて、産業の国有化を実施した。

労働者は資本主義の奴隷から、国家企業の奴隷となった。まもなくそれが不十分となるや、彼らは、テーラー・システムを実施する計画を立てた。すべての農民は人民の敵としてみなされクラーク（富豪）と同一視された。

それ以降、共産主義者は農民を破壊し、新しい農業搾取、つまり新しい国営地主の座に就いていった。

これが農民たちが「社会主義」から獲得したものである。彼らがまことにまっていた自由労働はどこへいったのか？ パンと家畜は、ほとんどすべて徴発され、その代わりに農民は、トロツキーの訪問と銃殺を受けた。パンを鉛と銃剣に交換することであった！

市民の生活は死にそうなほど退屈で、権力者たちによって決まりきつ

たものとなってしまった。幸福な人生、個人の進歩した自由は、かつて

経験したこともない前代未聞な奴隷制によって阻止された。あらゆる批判や個人の自由意志は、投獄によって、しばしば死刑によって罰せられる犯罪となった。死刑、この人間性の不名誉は「社会主義の祖国」で盛りを迎えた。

これらが、共産主義者がわれわれを導いた名高い社会主義である。われわれは、党の命令に従順に賛成し、働く役人と官僚たちを伴った国家社会主義を獲得した。「働かざる者は食うべからず」という標語は、「ソヴェト」の体制下で独特な形に変えられた。そして現在、それは「すべてを人民委員たちのために！」と変えられてしまった。労働者・農民・知識労働者たちは、彼らの命令に従い服従するしかなかった。

それは耐えがたいものとなった。そして、クロンシュタットは「ソヴェト的」な牢獄の鉄柵を最初に打ち破った。クロンシュタットは、各人が自からの労働の生産を自由に処理できるよう戦っている。

空しい激怒

嘲弄された自由を再建することを強く望んで武装した、クロンシュタットの自覚と勇敢な力は、共産主義者のくびきを打ちきった。彼らは人民の生活と幸福を、墮落した流血によって一握りでも支払うことを拒否した。

クレムリンの旦那方の恩恵のために、強奪、死、暴力、流血などが繰り広げられ、すべての個人の人生と幸福を愚かなものにしてしまった。苦しめられている者たちは、革命の要塞臨時革命委員会の形成によつ

第三革命の最初の礎石が築かれたところであり、ここに最初の戦没者の英霊が眠っている。

われわれの理想を築くために彼ら兄弟は、同志の墓の中に横たわっている。礼砲と共に赤い二十個の柩が下ろされる。それらの赤い柩は、戦鬨で流された血のシンボルであり、革命の噴火のシンボルでもある。それは、自由の灯火を甦えらせた。戦死者を照らす灯火は、我々を導く道程を照らす。その道は決してバラ色ではない。われわれは、幾多のいばらの道に出会うだろう。だがわれわれは決して後退しない。

暗殺者たちは、われわれが彼らの墓穴を掘ることを知っている。それも運命である。

戦死者のリスト

三月一四日十時より、海軍病院に於て（以下に続く）一人の赤軍兵士と水兵の記録が公表された。）

人民委員の増加

昨日町に於て、面白い立札を窺うことができた。

指導局は、溝に凍りついた山と積った雪を清掃する命令を、道路委員の中介によって指示された。大砲が唸り声を上げる中で市民は、仕事をするため町から出ていった。彼らは、シャベル・ツルハン・おの等々の必要な道具を探さなければならなかった。その時市民は、人民委員に対し前もって用具を準備すべきであるというアピールを全員一致で行なった。

それは、自由クロンシュタットの真実を窒息させる流血と嘘の激怒である。

発砲される一発一発は、労働者解放の時の前進をなしている。

革命的三頭政治防空隊

戦士の墓に赤い花環を

新たな墓が今日、クロンシュタットの錨広場に作られた。その場所は、

三月一四日、臨時革命委員会の会合がもたれた。その会合に於て、次の決議が採択された。

- 1、労働者と農民の監督に関して 現在のよ様な人民の思想を反映することがない、旧体ソヴェトによって選ばれ、組織された今日の機械装置の監督とコントロール、そして稔叫している社会状況に関して、同志ロマネンコの報告を聞いた。その後、旧いソヴェト機構での労働者・農民監督廃止について意見が交換された。そして、すべてのユニオンのメンバーの中から選ばれる工場同盟ソヴェトに、市民組織の監督を任せることが決定された。
- 2、元政治局の文化・教育局に関して 守備隊のクラブに、すべての文化・教育の仕事を与え、革命的三頭政治を廃止することを決定した。元政治局と、その下部組織で用いていた用具は、臨時革命委員会の指示に基づいて、革命的三頭政治局に代わる守備隊のクラブに与えられた。
- 3、クロンシュタット要塞の港湾航海施設と、海上輸送設備の修理工事に關して これに關係している組織代表者の技術評議會をすぐさま召集することが、ソヴェト同盟に依託されることが決定された。

a、工事に必要な労働者の数。

b、多量の必要工具。

o、臨時革命委員会の代表者と一緒に修理工事を行うに必要な期間。

兄弟たちの援助

自由の防衛者たちのために、次の贈物が艦隊の食糧配給局に送られてきた。三月一四日（提供者名と提供品の長いリストが続く）。三月一五

日（同上）。

第四砲兵師団の職業軍人の一般集會に於て、自由クロンシュタットの防衛者たちを助けるため、彼ら一人一人に長靴を与えることが決定された。同日、次に続く（二八人の）者たちが、長靴一足を与えられた。贈物は統々と届けられている。

感謝をこめて

三月一四日、氏名が分らない（匿名）一市民（婦人）が、バルチック艦隊の中隊海上分遣隊・革命的三頭政治局長の許へ、六ポンドの肉を置いていった。その肉は、前線に出兵している水兵分遣隊に送られた。同志は、この婦人に感謝の意を表す。われわれは、この氏名も分らぬ寛大な婦人が、多分、自分の最後の食糧を提供してくれたことを、大変有難く貴重に思う。

クロンシュタットの労働者の家族の統一を前に、人を裏切り、だました党は、悲惨な者たちが震えていることを理解せよ。

四人たちの決議

三月一四日、マネジに投獄され監禁されている二四〇人の将校と赤軍兵士の集會に於て、次に続く決議が採択された。

三月八日、われわれカデット・将校・赤軍兵士は、クロンシュタット攻撃の命令に従った。それは、共産主義者がわれわれに、クロンシュタットを占領しているのは、白色擁護者たちだと語ったからである。われわれは、水兵や労働者たちがいる町に接近した。その時われわれは、武

器を身につけていなかった。そしてわれわれは、白色擁護者の反乱などこの町に存在しないことを理解した。その上、ここは労働者自身が人民委員になっていた。

われわれは、自から進んで退去の誤ちに報いる。そして今、われわれは赤軍兵士の分遣隊に入隊できるよう臨時革命委員会に要請する。それは、われわれがクロンシュタットとすべてのロシアの労働者・農民の真の防衛者たちと共に戦うことを望むからである。

われわれは、臨時革命委員会が労働者解放のためにすばらしい道を切り開いたこと、更には、「すべての権力を党にはなくソヴェトへ！」という思想を評価する。

われわれは、共産主義者の固定化した目的に対して行なわれている臨時革命委員会のすべての活動と情宣を学ぶことを誓う。

委員長 (サイン)

書記 (サイン)

決議

トテルベン要塞の一般集會が、三月一五日開催された。臨時革命委員会の代議員の報告の後、次に続く決議文が採択された。

クロンシュタット全市の水兵・労働者・農民の同志諸君！われわれトテルベン要塞の守備兵は、悲惨な戦いのこの時点に於て、我らの兄弟たちに敬意の挨拶を送る。われわれすべては、暴力と欺瞞によって、悪魔の奴隸制によって再び縛りつけられた全ロシアの労働者・農民に息吹きを与え、我らの兄弟たちを解放するために死ぬ覚悟である。

われわれは、クロンシュタット前哨を死守する。われわれは、最後の瞬間まで我らの発言に忠実に従う。われわれは、まもなく要塞を取り囲む敵の戦陣を粉碎し、真の自由と、真実を我らの国じゅうにくまなくゆき渡らせることができよう。

ロシア共産党脱党者書簡

現在の社会状況について討論した後、ロシア共産党のメンバーであるわれわれは、自分たちの恩恵を確立するため、他人を不幸にすることに、武力によって権力を維持している共産主義官僚一派の活動に深く憤慨する。

われわれが入党したのは、労働者の血を流すためではなく、彼らに息吹きを与え援助するためであることを、ここに公表する。われわれは彼らを法律を無視した利殖主義者とみなし、革命の指標クロンシュタットの労働者と共に防衛することを誓う。今後われわれは、ロシア共産党の行為を放棄する。そして、臨時革命委員会の構成員となる。

労働者・農民の監督官（二人のサイン）

報告

以下に続くロシア共産党の脱党書簡が送られてきた。（四五人のサインが続く）。ロシア共産党の党籍を放棄する（職業が記載された六八人のサインが続く）。

人民管理のソヴェトの工場に於て、市民が供給した材料で仕立作業（下着）が行なわれた。

臨時商会公報局は、市民に消費材をくまなく分配した。

通達

食糧配給基地の革命的三頭政治局は、空カンに乗えないよう軍事部隊と市民に要請する。理由は、空カンの再利用である。尚、保持者は、次の住所へ送るように(質問事項と住所)。

三月十七日

クロンシュタットは昨日崩壊した。数千にのぼる水兵や労働者の死体が路上に横たわっていた。

囚人と人質の処刑が続いていた。

三月十八日

戦勝者は、一八七一年のコンミュニオンの記念日をほめたたえた。トロツキーとジノヴエフは、バリの反逆者たちを虐殺したティエールとガリフェを色褪せたものにした。

(完)

『クロンシュタット・イズヴェスチャ』の翻訳も、今回の第八回をもって最終回を迎えました。ほぼ三年にわたる長期連載であり、またその期間は、アナキズム誌の歩みとはほぼ軌を一にするものでした。訳者の吉原文明氏にねぎらいの言葉を送りたいと思います。

ロシア革命とその後のソ連の社会主義国家の建設がどのようなもので

あったかは、おそらくこれから正当な歴史的評価を受けることになると思います。クロンシュタットの蜂起は、すでにポオーリンを始め、二三のアナキストによる報告が出版されていますが、記録としての『イズヴェスチャ』紙の翻訳は、クロンシュタットを生きいきと描き出し、おり、欠かせない資料の一つとなると思います。(編集部)

(37頁よりつづく) はじめているということである。(一九七〇年) 先の課題に比較すると首肯し難い方向だと考えざるをえない。既存体制の自動的破局を前提とせず、革命的ケヴアルトの新たな組織形態の創出という二項を短絡させると浮びあがってくる革命像なのかも知れないが、他の項目で指摘された現代革命にともとも基本的かつ緊急な問いを、古典的革命観の弥縫策の前に放棄しているように思えて仕方ない。

社会主義社会、新社会のヴィジョンをどのように再構築するのか。権力打倒へむけた組織運動論としての労働者組織ではなく、労働者を体制的日常性から解き放ち、労働者個々人の自立にむけた生産の組織化は如何にして実現されるのか。現代資本主義社会の分析と批判を踏えつつ、模索しつみ重ねていかねばならないこれらの課題が、政治革命路線のもとにサポータージュされているのではないか。この点に多大な危惧を禁しえないのである。

編集後記

▽ 去る十月十七日に、長谷川進先生が亡くなられた。春先から不調だとおっしゃっていたが、ぼくは天候の不順によるものと思って、それほど気にしていなかった。何よりも、ブルードンに専念したいという先生のプランや、その面での本誌での仕事に気を奪われていたことによるが、亡くなられた今、ぼっかりとあいた空白を何とも埋めかねている。それはぼく個人の先生との私的な関わりによる以上に、おそらく今後ぼくたちが続けていくであろう當為にとつて、失なわれた得難い力を測りかねているからである。

かつてぼくが持っていた左翼やアナキズムそのものへの不満を、先生は形あるものにし、その向うべき方向を示唆し力つけて下さった。取り組むべき多くの仕事について語り、さまざまの助言を受けた。その成果を直接お目にかけることはできなくなったが、あとは、ぼくたち自身が応えていかなければならぬだろう。本号では、先生からお預りしていた「ブルードン思想の現代的意義を求めて」を掲載した。ブルードンを古典のままではなく、一見雑多ともみえるブルードンの思想を現代社会に引きつけて、その未来社会にむけた現代的意義を把握することを、先生は念願されていた。原稿の由来は「付記」に記した通りで、本誌のために書かれたものではなく、またいささか古いものでもある。近いうちに、先生の残された仕事を整理する予定である。受け継げるものは貪欲に吸収したいと思う。

▽ 長谷川先生の遺稿を掲載することの残念さを、しかし、いささか気持の上で救ってくれるものを今度の号は含んでいる。それは大橋君の「ブルードン主義的自主管理論のため」である。彼はここ二年ほどの間、ブルードンに取り組んでいる。今回は、あまり時間的余裕をとらずに依頼したので申し訳なかったのだが、忙しい時間をさいて執筆してくれた。次号には力作を寄せてくれるはずである。そしてブルードンの理論をもっとも現代的な視点において理解していることにおいて、長谷川先生と同じ視角をもっているのである。今後徐々に発表できるであろうブルードン思想の現代的意義のいくつかの論

稿を、先生にお見せしたかったと残念に思う。大橋君も交えて、グラスを傾けながら語り合いたかった……、といささか感傷的にもなってしまう。

▽ もう一つ、山本さんの「現場の復権をめざして」にも触れておきたい。これは、これまでがない、ユニークな報告だと思ふ。そこに表わされている彼女の考え方や姿勢、問題意識に、ぼくは力強いものを感じている。これまで自主管理とか労働の組織といった問題の立て方をぼくたちはしてきたが、こうした思考や方法に対して、貴重なリアリティーを与えてくれる点で示唆に富んでいる。その点できわめて刺激的である。

▽ 特集については、やはりせいっぱいといったところである。ポール・カードンの著作は、機会があれば紹介していきたいと思っている。ぼくは彼についてはわずかな知識しかもっていないが、その問題意識において、またその理論追求の真摯な姿勢という二点で共感を覚えている。カードンについては、『黒の手帖』21号(近々刊行される)に江口幹氏が紹介文を書いたそうなので、ぜひ合わせて読んで欲しい。

